

アスピリンで卵巣がんのリスクが低下

アスピリンの常用は、いくつかのがんのリスクを低下させることに関係していることが知られている。アスピリン、非アスピリン系非ステロイド性抗炎症薬（NSAID）、アセトアミノフェンの服用による卵巣がんのリスクへの効果については未確定である。そこで本研究では、鎮痛剤の服用と卵巣がんのリスクの関係について検討した。

12件の卵巣がんの症例対照研究が対象となり、総被験者数は実験群 7,776 人と対照群 11,843 人であった。統計学的に分析した結果、アスピリンの服用は卵巣がんのリスクの低下に関連性がみられた（オッズ比 0.91）。非アスピリン系非ステロイド性抗炎症薬についてはアスピリンと同様の傾向はみられたものの、統計学的有意差はなかった。一方、アセトアミノフェンについては卵巣がんのリスクの低下に関連性はみられなかった。服用頻度について検討した 7 件の研究によると、卵巣がんのリスクの低下はアスピリンを常用している場合に最も大きかった（オッズ比 0.8）。また、服用量について検討した 3 件の研究によると、低用量（<100mg）のアスピリンを服用している場合に卵巣がんのリスクの低下が最も大きく（オッズ比 0.66）、一方、非アスピリン系非ステロイド性抗炎症薬では高用量（500 mg 以上）の服用でリスクの低下が最も大きかった（オッズ比 0.76）。

したがって、アスピリンの服用は卵巣がんのリスクの低下に関連しており、とくに低用量を常用するとその効果が大きくなることが示された。このことから、心臓血管病やいくつかのがんの予防目的でアスピリンを服用している場合に、その用量や頻度によっては卵巣がんのリスクを 20%から 34%低下させることができるといえる。

出典：Journal of National Cancer Institute. 2014 Feb. 1; 106(2):djt431. doi: 10.1093